婦人と新社會

山田わか主筆

五月號

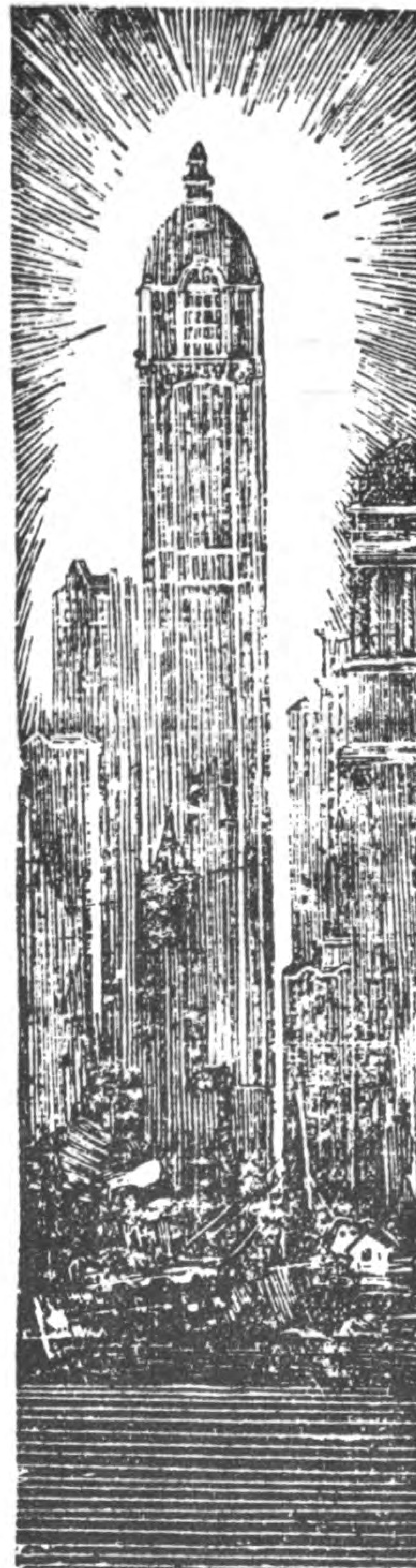
每月一回一日發行　第拾五號　大正十年五月一日發行



外に出て働くことが婦人の自由であると云ふのが一般の輿論であります。けれども、家庭に居て自分の子供を世話する代りに學校へ出て又は幼稚園の保姆となつて他人の子供を世話することがどうして自由であるでせう。愛する我が子や夫の着物を縫ふことの代りに紡績工女となつたり、仕立屋となつて見ず知らずの人々のために紡いだり縫つたりすることがどうして自由であるでせう。うちに居て我が子や夫のために食事ごしらへをしたり會計を見たりすることの代りに他人の臺所で働いたり他人の事務所で他人のために計算したりすることがどうして自由であるでせう？

自由と云ふことは或る意味から云ふと自分の本心の要求を滿すことであります。して見たならば、他人の子供よりも自分の子供の世話をしたい、見ず知らずの人の着物を縫ふよりも愛するものの着物を縫ひたいと云ふのが婦人の本心であつて、そして、そうすることが自由ではないでせうか？

尤も、最高な人間の理想は自分の子供も他人の子供も、家族のものも他人も同じように愛し得る境に達することでありませうが、まだ人間が其處迄向上してゐない時に當つては我が子我が家族を打ち捨てゝ置いて他人の子、他人の家族のために働くことは自由ではなく、却つて、自由の束縛ではないでせうか？



新社會の教育方針

今日の政治生活が停滞して居ると云ふ事實は世界至る處皆同じであります。そして世界の資本家と勞働者は戰爭の狀態にあります。國民はお互ひに喉の切り合ひをして居ります。何故でせう？

人間がまだ如何にして共同すべきかを知らないからです。共同することによつて幸福を得る術を知らないからです。其處で、二十世紀の仕事は眞の共同の原則を發見することです。二十世紀の教育は共同の精神を養成することです。

そして、其の方針の敎育は搖籃の中から始めなければならない。搖籃の中から始めて子供室、幼稚園、學校、遊戲、其の他あらゆる人間の活動を通じて共同の精神の涵養につとめなければならないのです。國民としての義務は每日の出來事からも社會政策からも又は政府からも學べるものではない。それは、生活と活動の方法を通しての外得られるものではないのです。自分は一國民である、社會の一部分であると云ふ社會的自覺を造らせることが學校の目的、集會の目的、家庭生活の目的でなければならないのです。つまり、私共人間の生活は相互依屬であると云ふことを兒童の頭腦に刻みつけるのが敎育の目的でなければならないのです。

敎育の目的は共同生活に或は社會生活に適した人間を造ることであります。ですから、あらゆる考へられ得る共同的方法が此の目的を達するためには學校に於ては用ひられなければならないのです。學校に於て、團體生活に對する自己の責任、則ち、團體的行爲を實行によつて學び、そして、自治制の階段を學ばなければならないのです。各兒童は他の兒童との關係、社會に於ける自己の位置を敎へられなければならない、每

日毎時間の相互關係を教へられなければならない、一言で云へば、今日迄の學校に於ては他の兒童を凌いで自己が優等な成績を擧げようとするのであつたのに反して、今後は、學校に於ける成巧のしるしは他人と共働爲し得る能力が出來たかどうかでなければならないのであります。

そして、其の能力を造るに付いての訓練は凡ての學科を共同的利益を根本として生徒を組織することが最も利益だとされてゐます。つまり、各生徒の努力を平等關係にうまく配當し、共働して學課を學ばされることが最も有効だとされてゐます。

各生徒は自分の考へは他の生徒の考へとは違つてゐるものだと云ふこと、從つて、自分の意見を云ふことは他人の考へを豊富にするのが目的だと云ふことを敎へられなければなりません。眞面目な自分の考へを云ひ現すことによつて同級生計りでなく、先生の考へに迄も或るものを附け加へることが出來る。そして、其の生徒の一團が御互ひに利益し合ふことが出來るのです。そして、こう云ふことはどんな小さい子供にでも出來ることです。

或るたつた六才の子供が母に連れられて繪畫展覽會に行つてモナ・リザを見た時に、其の繪に付いてどう考へるかと問はれて、其の子供は暗い顏して『此の婦人は小さい子供を可愛がるようには思へない。』と云つたそうです。そして、これは確かにモナ・リザの批評に或るものを附け加へたと云はれて居ます。

兎に角、子供は自分の考へを云ひ現すと同時に他の子供の意見も尊重しなければならないこと、自分の考へは大きな眞理の一部に過ぎないこと、凡てが合同して、始めて其處に一ツのまとまつた考へが出來上がることを敎へられなければならないのです。そして、集合的に學ばせることが集合的考察の訓練になると云はれてゐます。なぜなら、それが一ツの全と云ふものを各生徒が造りつゝあると云ふ感情を各生徒が持ち得るからです。いろ〳〵違つた意見が出て、論議されて、そして、まとまつて行くからです。其のために或る生徒は餘分なものを讀みもするであらうし、新しいことを調べもして智識を多くして行きます。かくして、生徒は毎日の課業に於て、又は、他の學校との競技に於て、自分達が全部の一部であると云ふ義務、及び、喜びを持つこ

とが出來ます。

今日迄の敎へ方は一人の生徒が他の生徒を手傳つてはいけないのでした。けれども共働生活の基礎を造るための新しい敎へ方は各生徒がお互ひに手傳ひ合はなければならないのです。もし、此の新しい敎へ方に競爭があるとすれば、其の競爭は、共働の智識に自分の分け前を出來るだけ多く出すことです。云ひかへれば手傳ひ合ふことの競爭です。ですから、生徒は自分の出したものに對して責任を感じます。のみならず全體としての課業が價値あるものとなります。そして、各生徒が其れに對して無頓着では居られないと云ふことになります。そして、其れが習慣になつてゐる結果は、學課に關してのみならず、其の外多くの學校のうちの活動、たとへば、或る者を調査したり、特種なものを研究したりする場合に何時でも集合的基礎の上に其れが整へられます。子供のために調査とか研究とか云ふ言葉は大き過ぎるなどと思つてはなりません。小さい子供は山へ行つても海へ行つても、直ぐに、獨創的な研究を始めるものです。

ですから、教師は子供のいろ〳〵な異つた考へを組み立てることを生徒に教へなければなりません。單獨な考へは有益ではないが他の考へと連絡を取ることによつて其の單獨な考へが有益になると云ふことを教師は生徒に教へなければならないのです。昔の博物館は一ッ〳〵ものを集めて置いて居たに反して、現代の博物館主事は特種の分類をして集合的の意義を造り出すことを重用と考へて居るのと同じように、現代の教師は生徒の心を昔風の博物館になぞらへて、唯、無茶苦茶にものを投げ入れるのではなく、生徒の心を有益な仕事場のように思はなければならないと云はれてゐます。

眞面目な意見の交換と云ふことが教育の眞髓であると云ふことに進んだ人々は氣付いて來ました。つまり、各生徒が持つてゐる考への違ひや、興味の違ひやを並べて整理することの有益さを人々は認めて來たのです。ですから、討論會と云ふものは大學校計りでなくあらゆる學校に設置されべきであると云ふ意見が此の頃あります。其の外、運動俱樂部、合唱俱樂部と云ふようなものが先進國に於ては、今、發達しつ丶あります。そして、これ等は單に健康とか、又は、藝術とか云ふ見地から計りでなく、

共働生活に必要な社會的課業を學ぶのが目的なのです。

學校の自治制と云ふことは複雑な問題ではありますが、併し、其の目的は生徒のために一種の智的雰圍氣を造ることです。則ち、學校を政府になぞらへ、各生徒が一國民となるのです。そして、其の國民は唯單に法律に従ふのでもなければ、又、唯單に投票して主宰者を選むのでもなく、併し、各人の最高な理想、各人の精神の發を共同生活を通じて滿足させる。これが本當の實際政治であると云ふことを自然に悟れるような空氣を造ることです。

有識な國民としての準備は學校に於て爲されなければならないので、歐米の先進國に於ては、此の學校中心と云ふ運動が既でに始まつてゐます。此の學校中心運動と云ふのはどう云ふものかと云ふと、いろ〳〵の形式の集團的活動を自治制によつて經營することです。で、其の精神は私共の意識の中心を私生活から社會生活に引き移そうとするのであります。そして、小團體的活動を通じて大團體的活動の準備をしようとするのであります。そして、共通の善のために各人の最善なる努力を注ぐことの準備

としようとするのであります。

かくの如き修養を經ることによつて、共同生活の意識が直ちに各人の責任觀念となります。今日に於ては、如何なる人間も共同生活、則ち、社會生活を逃れることは出來ないのであるから、自分は社會にとつてどれだけの價値があるかと云ふ質問を始終頭の中に置かなければならないのです。其處で、學校中心運動の目的は國民の心のそう云ふ狀態を生み出すことを目的とするのです。

其處で、要點は、私共の各行爲、私共の仕事、私共の家庭生活、私共の要求する娯樂、私共の讀む新聞の種類、子供を生み育てること、それ等が皆私生活に屬するものだと考へられて來たに反して、併し、それ等が社會其のものを造つて居るのであるからして、それ等を社會的行爲と考へなければならない、社會的行爲とは直接社會に出て働くこと計りでもなく、選擧する時ばかりでなく、政治的の會合に出席する時ばかりでもなく、私共の毎日の生活のあらゆる行爲が社會的行爲であると見られなければならないのです。各人の情操がそうなつた時に、今日のように國民同志がお互ひに喉

を切り合ひをするような馬鹿氣た悲慘事は止むでありませう。

群集哲學、群集政治、又は、群集愛國主義は最早役に立ちません。動物のやうな群集の力は唯社會を騷がせる計りであります。其處で、其の群集を組織することが政治に於ける新しい方法でなければなりません。又、群集の組織は未來の産業組織の基礎であります。國際政治の土臺であります。私共が今盲目的に求めてゐる新しい世界は群集を組織することによにて得られるものであります。組織ある團體から創造力は生れます。團體生活の活動から創造力は進歩して行きます。

二十世紀の敎育は此の創造力を完全に導かうとするものでなければなりません。

母として妻として女が有つてゐる理想と、彼女達が義務と人生を如何に理解するかのうちに社會の運命がある。

——アミールの日記より——

社會制裁機關としての家庭

現代の經濟組織に於ては個人に重きを置くの結果家庭の意義が輕視されて、そして住宅は共同家屋にすべきであると云ふやうな意見があります。けれども、これは家庭の使命を全く諒解しない結果であります。

家庭は學校のやうに集合的に同じやうに造ることが出來るものではありません、元來、家庭と云ふものは一般的の本能から直接に出來たもので元始時代に於ては社會制度と云ふよりも、むしろ、自然の産物であつたのであります。

併し、人間が進歩するに從つて性の本能親の本能から生れた關係を最善な形式にしようとして出來上がつたものが家庭と云ふ一つの制度であるのです。ですから、人類の進歩に最も多く貢献した社會は家庭に最も深い注意を拂つてゐました。そして家庭

を最高に向上させることに成功しました。其れにも拘らず家庭の意義を輕視しようとする或る學者は『夫婦關係、又は、親子關係を制度化しようとすることは間違つてゐる、人間が進歩すればそんなものは不必要になる』と云つて現代の離婚の殖えたことや、家庭内の各員が益す個人化するのを『各人がより大なる自由を獲得するの前兆』だと見て其の事實を歡迎してゐます。そして、又、『人間がもう一歩進めば一夫一婦を嚴守することなどは無意義になる。丁度、一つの社會制度であつた宗教が少しづつ〳〵個人に關することとされて來たやうに男女關係も追々に個人的になつて、社會が其れに干渉する必要はなくなつて來る』と云つてゐます。

成程、男女關係が唯單に一人の男と一人の女の關係である間はそれは全く個人的の事柄で濟みます、私もそれは充分に承諾します、けれども子供が出來た時には、もう、男女關係は全々個人の事柄ではなくなります。未來の社會の運命は今日の子供の質によつて定まるのであるからして社會は其の子供が育てられる家庭に無干渉では居られないのであります。ですから、健全な思想の持主には家庭の社會的意義と云ふことが

益す〳〵重要になつて來るのであります。

實際に、又、家庭の社會的意義は益す明かになつて來ました、過去三十年の間非常な努力で社會それ自身を科學的に研究した社會學が家庭の爭ふべからざる社會的意義を確立したのであります。人格の養成のみに關しても家庭は社會其のものと殆ど同一物である程に社會的の意義、且つ勢力を持つてゐるものであることを社會學者は立證しました。

世界の人口の少くとも三分の一は所謂獨立の出來ない、又は、個人としての權利を振り廻すことの出來ない子供であると云ふことです。そして、其の子供が勤勉な有益な一人前の人間になるのも、又は、怠者になつたり、悪人になつて社會の厄介者になつたりするのも其の原因の大部分が子供の家庭にあると云ふことは世間周知の事實です。慈母の愛情により、嚴父の訓練により、又は兄弟にいじめられたり、弟妹に同情を持つたりして、子供は家庭に保護されると同時にいろ〳〵な刺戟を受けて人となります。未來の國民は全く家庭に於て造られるものでありますから國家は、もし、其の

眞の使命に目覺めるならば、到底、家庭に無干渉では居られなくなるのであります。

ですから、歐米の文明國に於ては多くの規定を設けて家庭檢閲掛りを設置しました。そして、子供に關する一切に付いて兩親の相談を受けたり、忠告をしたり、又は子供の過度な勞働を妨止することに努力してゐます。家庭の意義を内容的に見るならば、第一、家庭は老若男女を含んで居るものです。從つて家庭其のものは絶えず新になつて行きます。家庭が國家の基礎となつてゐるのであります。凡ての社會制度の構造に非常な勢力をもつてゐる年長者と年少者の關係や、又は、平等と云ふ關係は家庭内の各自の關係に於て最もよく發達するのであります。

第二に、家庭は社會秩序を保存する作用をもつてゐます。なぜなら、凡ての種類の社會的財産、則ち、文化を現時代から次時代に傳へる重要な仕事は家庭で行はれます。言語を始め、思想、政治、宗敎、道德の標準に關する信仰、藝術に對する趣味其の外智力上の一切の事柄も、皆、家庭を通じて次の時代に移されます。第三に家庭は社會進歩を增進させる目的を持つて居ります。家庭は社會に於る利他主義の製造所で

あります。社會の向上は殆ど全く共同によらねばならないものでありますが、其の共同は利他主義に立脚しなければ各人が滿足するやうに行はれないものであります。そして、其の利他主義は家庭に生れ、家庭で養成されるものでありますから、家庭が社會進歩の主なる源であるのです。家庭生活があらゆるものを社會化する學校であるのです。家庭の全員が一所に集まつて食事をする時に、此處に一大社會化の要素があるのであります。

現代の產業と家庭の關係は重大なる問題、恐らく現代に於ける最大なる問題でありませう、昔の產業は家庭に從つて、家庭を中心にしたものです。そして、現代の產業は昔の其の家政を突拍子もなく大きく擴げたものでありますが、其の結果は產業が家庭から離れたのみならず、家族の結束を緩めてしまひました。つまり、事實上、家族を解散したやうなかたちになり、家庭の意義を沒却しようとする傾向になりました。そしてこれは容易ならざる社會上の禍ひの根源とならずには居ません。其處で、健全なる社會の要求は何處迄も產業を家庭に服從させることであります。

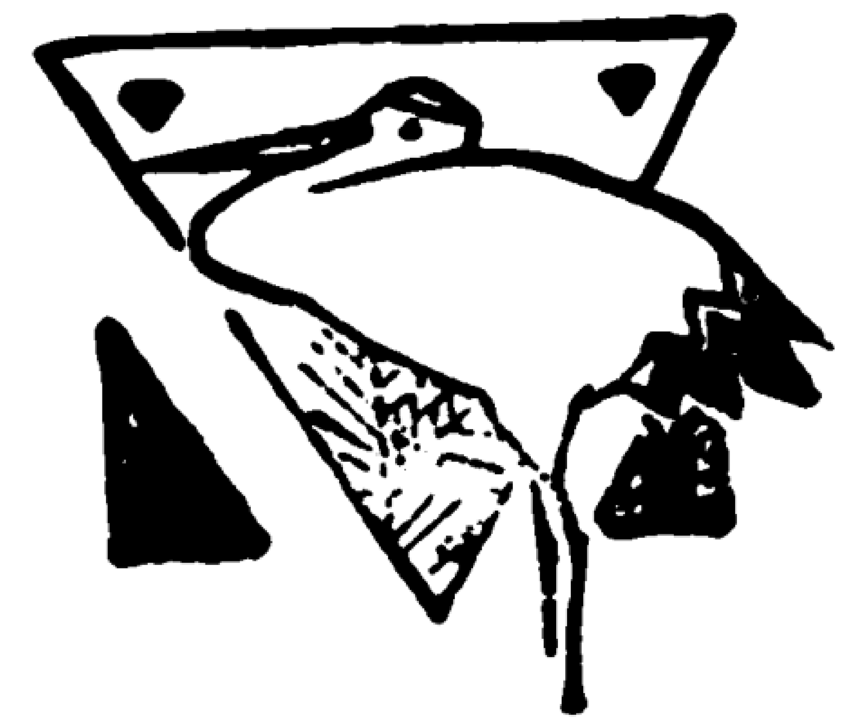
今日のやうに人が產業に服從するのではなく、產業を人に服從させ、しかも、其の人の家庭の幸福を增進させるやうにならなければならないのです。一時、一勞働者の家族は、其の勞働者の雇主とは何等の關係も存在しない。であるから、其雇主は其の勞働者の家族に對しては何等の責任もないと云ふやうな議論も立てられたものですが、併し、これは全然勞働を物品と見て、產業と家庭との關係、及び家庭の社會的意義を見ることの出來なかつた謬見であつたことに今は誰でも氣が付いて居ます。

家庭の意義、及び其の使命を見ることの出來ない結果は、又、婦人を家庭の外に追ひ出します。そして、私が其の非を鳴らして家庭婦人の位置の重要なることを高調致します時に、それでは婦人の個性をどうする、人としての婦人の胸に燃える眞純な希望をどうすると云ふ樣な私の意見に反對する聲も聞えます。成程、今日迄の家庭に於ては婦人は一家の眞の意味の主婦ではなく、家長なる男子に從屬してゐたのですから婦人の個性も、婦人の胸に燃ゆる希望も全然壓迫し盡されて居ましたが、併し、これは家庭其のもの丶罪ではなく、家庭內の家族間の關係が間違つてゐたからです。人と

しての價値を備へ、又、人としての威嚴も見識も確立してゐる婦人は藝術に於て、學問に於て、又は、職業に於て其の個性を發揮し得ると同じやうに其の家庭に於ても個性を發揮し得ると、私は信じます。

實際、自覺ある婦人は、全然、男子の家である家庭內の一つの道具となつて、自分の個性も希望も窒息せしめられるやうな空氣の中に我慢出來るものではありません。ですから現代の男子、並びに、社會は人類進步の過程に添うた要求に從つて、家庭婦人の重要な位置を認めて相當な尊敬を家庭婦人に拂ふか、さもなければ、家庭婦人に對する今迄の態度を持續して其のために多くの有爲な婦人を家庭の外に飛び出させ、幾多の悲劇を生み出すか、二つに一つを取らなければならないのであります。

勿論、私の家庭婦人に關する意見は一般婦人の生活の原則を明かにしようとするものであつて、たま／＼家庭婦人として適して居ない、そして、他の道に適してゐるし、又、それを好むと云ふ婦人の態度を非難しようとも反對しようとも思ふものではないことを此處に附け加へて置かうと思ひます。



社會主義の立體的考察

マルクスの資本論

一

社會主義は現代に於ける大題問である。故に、社會主義がどう云ふものであるかと云ふことに付ては此の主義に贊成する人も反對する人も共に一通りは研究しなければならぬものである。併し、此處に斷つて置かなければならないことは社會主義は一ッの社會政策であつて、科學ではない。

社會主義の學說中で今日先づ最も勢力あるものは正系マルクス主義か、或ひは其の延長である。そして、マルクス主義の根本概念とされてゐるものは歷史の唯物觀である。で、これはどう云ふことを意味するかと云ふと社會の經濟組織が一切の社會事實を決定すると云ふのである。政治も道德も宗敎も其の外美的事實に至る迄、一切が經濟組織の影響を受け、それによつて形づくられて行くと云ふのである。

此の點から見るとマルクス主義は極度の經濟的命數論である。云ひかへれば、環境が人間を造つて行くと云ふ議論になるのである。實際に、又、マルクスは『生產の方法を變へることによつて、人間の凡ての社會關係は變つて行く』と云つてゐる。

人間が環境によつて支配されると云ふのは實際、事實である。けれども、それは絕對的のものではないと云ふことをも私達は忘れてはならない。動物は全然環境の事情によつて其の性質を變へて行くけれども、人間には自分自身の意志によつて或る程度迄は環境を變へて行く力がある。そして、其處が人間と動物の異ふ點であることを私達は認めなければならない。殊に、人間は心理的にも環境を變へて行くのみならず、倫理的には全く環境を排斥する力を持つてゐるものである。

故に、假りに社會主義を一ツの科學とした處が、これが社會現象の全部を說明するものではない。なぜなら、社會現象は人間の內部と外部とから來てゐるものであるのに、社會主義は其の外部計りを取り扱つてゐるのであるから。

社會主義に對する批判は今迄にも澤山あつた。けれども、其の大抵は、唯、社會主義の主張の一ツ一ツを批判してゐたのであるから、それは全然平面的であつた。其處で、私は社會主義に對する總合的、或ひは、立體的の批判を此處で試みようと思ふ。

二

社會主義の學說は古典經濟學の學說と同じように古いものである。年代から云ふと古典經濟學よりも社會主義の學說の方が古いかも知れない。なぜなら、經濟學者と云ふ名稱が人の耳に這入る前に既でに、社會主義者と云ふものが存在してゐたと云ふ形跡があると云ふことである。猶、其の上に、經濟學が科學的になつたのは、社會主義が此の經濟學に反對して、そして、はつきりとしたかたちとなつて現れて來た後のことだと云はれてゐる。其れはさて置き、一體、社會主義とはどう云ふものであるかと云ふことを次にかいつまんで見よう。社會主義は大體に於て批評的で散漫ではあるが先づ次のように云ふことが出來る。

第一。凡ての社會主義の學派は、社會の混亂の原因を資本家階級の存在に歸して居る。資本家階級が無産階級を自己利益のために使役し、自分等が所謂社會的寄生蟲でありながら社會の富を自分等の手に集中して居るからだと云ふ。故に、社會主義者は社會の新しい秩序を要求し、そして、其の新社會に於ては資本の私有權、並びに、賃銀制度を、たとへ、全然廢止しない迄も大ひにそれに制限を加へて行かうとする。

此の點から社會主義は、一切の私有財産を廢そうとする共産主義と、生産の用具の私有財産權を廢そうとする集合主義と、土地家屋其の外の不動産の私有財産權を廢そうとする農業社會主義と、此の三ツになるのである。其の外、未來の社會現象に關しては甚だ漠

然としてゐる理想社會主義者（ユートピアン）の學說は今は、誰も重きを置いてゐないけれども、併し、實は此の學派が或る正義の原則を基礎として一歩々々と今日の社會主義者が主張するような社會を造るに大なる貢献を爲してゐるのである。科學的社會主義と傲然と自ら宣言してゐる集合主義者（コレクテビスト）は新しい社會組織を提案することもせず、又、未來の社會がどう云ふ風に建設さるゝかも云はず、唯、目前の問題に付いて云々してゐるに反し、理想社會主義者はいつも新しい社會組織を提案してゐる。そして、此の理想社會主義の提案のうちで最も興味あるものは、未來の理想社會は今日の社會のうちに孕まれてゐる、今日の此の社會から生れ出づべきものであると云ふことである。

第二。或る種類の社會主義は古典經濟學者が攻擊するように革命、或ひは、命令によつて、今日の社會を上から下へひツくり返へそうと云ふのではない。社會主義者は進化を信ずる。彼等の主張する革命は、ものゝ中に潜在してゐて、絕へず、熟しつゝある過程が熟しきつた時に勃發したもので要するに進化の方法の一ツに過ぎない。そして、これは社會進化のみならず、猶、又、生物學上、及び、地質學上の進化の方法と同じことである。つまり、地震は地球の今日の形を決定した一ツの要素である。又、雛鳥が卵から出る時に卵の殼を破壞するのも一ツの革命なのである。實に、如何なるものゝ生れも皆

革命であると彼等は信じて居るのである。

第三。社會主義は出來るだけ廣く集合主義の範圍を廣げようとしてゐる。彼等は、今日、個人の經營になつてゐる一切のものを公共的事業にしようとするのである。彼等が國家作用の延長を主張するのは個人の企業を集合經營に移す迄のつなぎに過ぎないのである。そして、彼等は、一度、其の事業に成功すれば國家其れ自身を廢し得ると云ふのである。社會主義的社會になれば國家は其の政治的の性質を全く失つて、單に、經濟的の國家になつてしまうのである。故に、彼等が主張する國家は大きな共同社會の經營委員會になつてしまうのである。此の點から純社會主義と國家社會主義とは分れて來るのである。

第四。今日の社會主義の表面に現れてゐる特長は勞働階級の利益をのみ認めて他の一切の利益を認めない。彼等の主張によると資本家は今日の社會を造つたが、併し、彼等は最早社會の寄生虫になつてしまつてゐる。であるから、どこ迄も彼等を撲滅しなければならないと云ひ、そして、これが階級爭鬪なのである。これが社會主義のプログラムの根本原則である。そして、此の特長は昔の社會主義には無かつたのである。

此の社會主義の民衆的の色彩はマルクス主義の出現によつて一層濃くなつたものである。併し、社會主義は今日迄に經

驗された處によると積極的な學說、則ち新しい社會建設のプログラムとしては失敗してゐる。現に、所謂、科學的社會主義は新しい社會組織の計畫を式に現すことすらしなかつたのである。

三

一體、マルクス主義は大膽な概念と偉大な論理的の一致を特長としてゐるが、併し、これを詳細に見るならば、此の論理の組織の要素は新しいものでもなく、猶、又、偶像破壞的なものでもない。と云つて、マルクスは以前に人が氣付いて居なかつたものを發見したのでもなく、既知の事實の蘊奥を極めた公式を發見したとも云へない。併し、全體としてマルクス主義は文化の各方面を取り扱つた科學のうちに滅多に見られない獨創的な處があると云はれてゐる。

此の特長のどれだけがマルクスの人格に歸すべきものであるかは分らないけれども、併し、外の經濟組織からマルクス主義を區別する處のものは人格的特質の事柄ではない。そして、マルクス主義は其の前提並びに目的に於て、マルクス以前の凡ての理論からは異つた特長を持つてゐるのである。

マルクス主義に反對な批評家はマルクスの出立點の過激な性質を充分に見ることが出來なかつたので、其の大體の又は小さい問題に止まつてしまつてゐた。かと思へば、これに反してマルクス主義を奉ずる人々は、前に擧げた二點、則ち、マルクスの前提と目的を玩味せずに、唯、

マルクスの理論の平面的な註釋を主としそして、同志を其の信仰に導くことを以て仕事としてゐた。全體として見て、そして、其の前提と目的に輝らして見ないならばマルクス主義は理解出來ず、從つて、主張出來るものではないのだが、マルクス主義の尊奉者等の多くは其の點に氣が付かないと云はれてゐる。又、古典的經濟學の見地から、マルクス主義の一ツ／＼の孤立した現象を論ずることは、丁度、平面論を以て立體論を論ずるのと同じように無效である。

マルクスの前提と目的に關しても、又は、彼の研究の目的に關してもマルクスの位置は全く統一されたものではない。單獨、則ち、一ツのものではない。つまり、マルクス主義は一ツにまとまつた純なる哲學ではないのである。と云つて彼の理想は彼以前の哲學者の説を一ツにまとめたものでもない。唯、マルクスは一種の建設者であり、同時に實行を目的とする運動の主領である。

そして、彼が破壞的な批評家となり、同時に、創造的な考察をするようになつた理由は彼はもとより理論家であつたので經濟現象の解剖をした。そして、其の解剖の結果を科學的智識の一ツの組織に組み立てることを彼は仕事としてゐたからである。同時に、彼は矛盾しないように其の理論上の仕事の進歩が一歩々々どう云ふ風に彼の宣傳に影響するかを常に見はつてゐた。從つて、彼の仕事には辯護士の辯論のように偏見が加はつてゐたことは止むを得なかつたかも知れない。

と云つて彼の宣傳の目的が彼の研究を亂したとは云はれない。彼の社會主義的の偏見は彼の攻撃論を色つけているには相違ないけれども、彼の論理は偏見を大ならしむることが出來ない程度に正確であつた。

マルクスの經濟理論ほど、論理の正確なものはない。彼の經濟組織の如何なる部分も、又、彼の學說の如何なる條項も全體の一部として、及び、全體の出立點と、そして、それを統べくゝつてゐる前提と目的に輝らして見るのでなかつたならば正當には了解も出來ず、批評も出來ず、又、辯護も出來ないわけである。

四

マルクスと云ふ一個の人間が出來るに付いては前以て二ッの大きな力が存在してゐた。そして、それは、唯物主義的ヘーゲル主義と、英國の自然權論である。マルクスは若い時からヘーゲルを研究してヘーゲル主義には精通してゐた。そして、後に彼は英國の自由權論と自然自由論に精通したのである。そして、此の自然權と自然自由の組織はマルクスの生活の理想となつて最早動かすことが出來なくなつたのである。

處が、マルクスは其の自然權の原則の基礎は何であるかと云ふことに對しては批評的の態度をとつてゐなかつた。其の上に彼はヘーゲルの發達論の根本原則にも充分觸れてゐなかつたのである。併しマルクスの宣傳の理想は其の自然權の理想である。そして、その理想を働かせた理論はヘーゲルの發達論である。である

から、其の說き方の方法と、其の理論の建設の方法はヘーゲルの辯證法から來てゐるのである。

　マルクス主義の最も興味ある處はマルクスと革命的社會主義的運動との關係である。マルクス主義を批評する人々の大多數の注意を今猶ひ丶てゐるものは、直接宣傳に影響する彼の學說であるが、批評家に云はせると、彼の其の學說のうちの重もなるものは價値論である。そして其の價値論のうちの第一は、資本家が勞働者を利己的に使役すると云ふこと、第二には勞働者が勞働の全生產物を所有する權利があると云ふのである。

　マルクスは此の勞働價値の學說をリカードからとり、又、リカードを通して古派の經濟學に行つてゐる。であるから、勞働者等は全體の生產物に對して請求權があると云ふマルクスの說は、たとへ、マルクス自身ではそうは云つてゐないけれども、十九世紀の前半の英國の經濟學からとつたものであるらしいのである。殊に、ウイリアム・タムソンからとつたらしいのである。であるから、マルクスの學說は其の表面に於ては、其の當時英國の哲學を潤ほし、そして、自由主義運動に哲學的の地步を與へてゐた英國の自由權の概念の發達したものに過ぎない。

　處が、マルクス主義を烈しく攻擊する批評家は、宣傳の要具に使はれた其の說に計り多く重きを置いて、マルクス主義全體としての組織に遙かに重要な點である他の要素を批評することを忘れて居るようなかたちである。所謂科學的社會主

義と云ふ方面にのみ注意することがツイにマルクス主義に獨創のあることを抗みそして、マルクス主義を、英國の自由主義と自然權の萌芽であると云ふことにしてしまつた。併し、これは一方に偏した批評である。所謂科學的社會主義の或る原則に對しては其の攻擊は正當であるかも知れないけれども、併し、マルクス主義の全部の批評としては要點を外れてゐるのである。

　マルクスがタムソンに負ふ處は確かに多いに相違ない。勿論、表面から見ればマルクスの說はタムソンに似てゐる。併し、マルクスの價値、剩與、及び、利用（エキスプロイテーシヨン）の理論ですら、タムソンの學說其のものではない。猶、又、マルクス主義は英國の功利論者に負ふ處は澤山あるが、併しそれでも、其の精神、其の詳細、及び、全體として見る時には、矢張り、後ヘーゲル主義に屬するものである。

　それ故、マルクス主義の詳細をのみ調べ、そして、其の思想の系統を跡付けて見るだけではマルクス主義が一般經濟學にどれだけの貢獻があるかは分らない。けれども、むしろ、マルクス自身の出立點から始めて彼の理論の各方面への延長に至り、そして、全體を遠くから眺めることによつてマルクス主義を了解することが出來るだらう。實は、恐らく、マルクス自身ですらも、あまりに自分自身の說に熱中してゐたゝめに自分自身の理論の全體を見ることが出來なかつたゞらう。

五

けれども、今日に於てはマルクス主義を稱へる人は見ようとすれば、或ひは、氣が付きさへすればマルクス主義の全體を觀測することが出來る筈である。

マルクス主義の廣義の組織は歴史の唯物觀のうちに含まれてゐるものである。そして、この唯物觀はもと〳〵ヘーゲル主義のものである。たとへ、それはヘーゲルの左黨に屬するものだとは云へ、ヘーゲルから出たものである。假りに、社會主義の先祖が英國の自由主義だとしても、其の自由主義が歴史の唯物觀、則ち科學的社會主義を造つたと假定しても、併し、マルクスが彼の社會主義に持ち込んだ概念は、矢張り、ヘーゲルの辯證法を變化した枠であることは動かすことが出來ない。

ヘーゲルは『考へることが存在することである』と云つた。けれども、マルクスは『存在することが考へることだ』と云はうとした。併し、そのどちらが先きかと云へば、どちらだとも云ふことが出來る。そして、いづれの場合に於ても、此の二ツの關係はどちらが原因でどちらが結果であると云ふことは出來ない。唯物主義の概念によれば、人間の精神生活、則ち、考へることは物質的の關係に於て存在してゐるもの丶反射である。この點は正系のヘーゲル論者が、物質界は精神界の反射であると云ふのと同じである。そして、此の兩方の理論が運動、發達、進化、及び、進歩の概念である。そして、其の兩方ともが、運動は必ず衝突或ひは、爭鬪によつて起るものだと考へ

られてゐる。
運動は進歩の性質を持つてゐる。除々と目的に進むことが運動である。云ひ現したかたちに於て、其の活動のうちに含まれたものを實現する方に除々と進むことが運動である。猶、一歩、進んで云ふなら、運動とは自分で條件を造つて、そして、自分で働くものである。運動、或ひは、進化の方法となる爭闘は、ヘーゲルによれば、辯證法を用ひた自己實現のための精神の爭闘である。そして、歷史の唯物觀に於ては此の辯證法的運動が所謂マルクス主義の階級爭闘になつてゐるのである。

此の階級爭闘は、一般に、物質的であるように考へられてゐる。けれども、マルクスの本當の意味の物質的と云ふのは比喩であつて、それは機械的、或ひは、物理的、又は、生理的の意味ではない。つまり、經濟的である。勿論、階級と階級の間の生活資料に關する爭闘であると云ふ意味に於ては物質的である。そして歷史の唯物觀は、生産及び交換が各社會秩序の土臺であると云ふ原則から進んで來てゐる。

社會秩序は階級爭闘を通して成立するもので、社會の發達の一時期に於ける階級爭闘の性質は經濟的生産、及び、交換の其の時の方法によつて決定せられる。それ故、社會進歩の運動の辯證法は慾望と云ふ精神的平面に動いてゐるので、機械的及び生理的或ひは物質的平面に動くのではない。其れはいはゞ高尚化した唯物主義である。どうして、高尚化したか

と云へば、有識な精神の存在によつて高尙にされたのである。けれども、生活資料を生産すると云ふ物質上の事實が其の條件になつてゐるのである。

マルクス主義とダーウイン主義との相違、並びに、マルクス主義のうちに於ける、一方の物質的事實の範圍と、他の一方の精神的事實の範圍との間の相違を、マルクス及びエンゲルスは階級爭鬪の性質のうちに其れが現れてゐると云つてゐる。そして、階級爭鬪は利益の動機から進んで來てゐると云つてゐる。此の階級爭鬪の特色を此處に少しく云ふ必要がある。

此の概念はダーウイン主義ではない。と云つて、正系ヘーゲル主義でもない。これは功利主義から出てゐる一種の快樂主義である。從つて、階級爭鬪はヘーゲル主義に屬すると云ふよりはベンザム主義に屬するものである。

此の唯物主義の概念の範圍內、則ち、文化のうちのマルクスは現代の解剖と其の結果を理論的に組織することに全力を注いだ。そして、今日の生産の方法が今日の制度的、智力的、及び、精神生活を決定するが故に、此の議論は必然資本主義の生産の理論から始まると云つてゐる。そして、資本主義の下には生産は商品の生産であるから、その目的は市場に於ける價値である。生産が人の用を足すと云ふよりも市場に於ける價値であると云ふことに付いて、マルクスは資本主義を攻擊してゐるのである。であるから、價値論がマルクスの經濟學の重用なもの

になつてゐる。同時に、彼の全體の解剖が其處から出立してゐるのである。

ヘーゲルのものに對する考へに於て唯一の實體は開發されて行く精神の生活である。そして、唯物主義の概念のうちに含まれてゐる後ヘーゲル主義によると此の實在が則ち社會生活である。そして、物品が産業の結果である以上、物品は人間の社會生活の生産高である。けれども資本主義の制度の下には交換價値を決定するものは競爭的利潤を得ることである。故に、交換價値はもの丶眞價と比例がとれなくなつてしまつてゐると云ふ。

其處で、マルクスの批評家は、普通、價値の概念と交換價値の概念とを同視して、そして、マルクスの價値論は今日の分配組織の下には價値と云ふものを説明しないと云つてゐる。それで、マルクス主義を反駁したと思つてゐるのであるが、併し、それは要點に少しも觸れゐないのである。併し、批評家の此の誤解はマルクスが其の要點をわざと不明にしてゐたのにもよるであらう。

マルクス主義の價値論はマルクス主義の本流に含まれてゐるのであつて、其の本流から引きぬいて來て造つたものではない。又、マルクスは、此の學説がリカードの勞働價値論と同じ性質のものだと云つてゐるけれども、併し、此の二ツの關係は表面の一致であつて、内容は異つてゐるのである。

リカードの説によると價値の源と其のはかりは生産者の努力と犧牲である。そして、これは大體に於て、功利主義と同

じ位置にあるものである。實に、勞働に對する決定的な事實は其の苦痛と云ふことである。リカードの功利主義的哲學に於てはこの苦痛よりも大きな事實はないのである。從つて、彼の剰餘價値論は其處から生れたのではない。又、勞働の生產力の蓄積的な處からでもない。リカードの經濟學は勞働の生產物と、そして、資本家の我慢の苦痛のうちに、產業の蓄積的生產力を探さうとするのである。

これに反して、マルクスは生產に於て費された勞働力それ自身が生產物である。勞働のために費した苦痛と生產物と同じなのである。從つて、生產に費された勞働力の價値と、造られた生產物の價値の間に起る不一致が剰餘價値と云ふ概念になつてゐるのである。

そして、資本蓄積の法則は、先づ、次のやうだと云つてゐる。賃銀は賃銀契約に於て買ひ求められた勞働力の價であり、物品の價は生產された物品の價値である。從つて、生產物の價値は勞働力の價値に超過する。そして、其の超過したものが賃銀契約の力によつて資本家の手に歸する。そして、資本家は其の一部を蓄積して徐々と資本を殖して行く故に、第一に、剰餘が大きければ大きい程資本は增加する。第二に、資本が大きくなればなる程、雇はれる勞働力も大きくなる從つて、剰餘生產物がだん／＼多くなる。

それ故、資本の增加は仕拂はない剰餘生產物から取つて來た不勞利得であると。

先づ、前述のようなものがマルクス主義の輪廓であると同時にマルクスの資本論の梗概である。勿論、資本論の第一卷の梗概であるが、併し、マルクスの資本論の全體の計畫は其のうちに云ひ盡されてあるのだからして、これによつて彼の大體の說は分るわけである。



米國婦人と法律

『法廷は今迄も、又、今猶はつきりと男性的であるが、此の男性的な制度を人間的制度に變更しなければならない。そして、そうするには司法行政と法律の適用に婦人が加はらなければならない。で、これは婦人を區別する法律を造り直すと同じようとに重要である。恐らく其れより一層重用であるかも知れない。故に、婦人が判事となり陪審官となり辯護士になることを奬勵しなければならない。法律の全體の構造のうちに婦人が公平に代表されてある迄は法廷に於て婦人は公平なる裁判を受けることは出來ない。』

と云ふ趣意の下に合衆國の或る州に於ては婦人に陪審官たることを許さなければならなくなつた。けれども、アイオア

州に於ては婦人に陪審官たる資格を造らせるために實際に陪審官となる迄に一年間の猶豫を與へてゐると云ふことである猶又フロリダ、ミネソタ、メリーランドに於ては陪審官の資格の男子と云ふ形容詞が取り去られないために、又、ジエオルジア州に於ては婦人を採用する法律上の明記がないために婦人は陪審官になることが出來ない。其の外の州、たとへばテキサス、マサチユセツ、デラウエーアの如きは參政權の修正案によつて婦人に陪審官たるの權利を與へたにも拘らず、まだ、裁判所が其れを認めないと云ふことである。

で、米國國民婦人黨は婦人の權利使行に關してのそれ等の障碍物を一日も早く取り去らうと決心して居る。其の外、此の婦人黨が目下力を致さうとしてゐることは家庭に於ける夫妻の位置に付てゞある。夫婦の住んでゐる家は夫の家であること、そして、家庭をとゝのへる義務は重もに婦人の手にあるのに其の家庭の位置を定める權利が夫にあるのは不都合であるのみならず、妻が家賃を拂ひ、一家の生計を立てゝゐても矢張り家の名前人が夫であると云ふのは間違つてゐると云ふのである。又、後見人に關する法律は大抵の州が皆同じで、子供の後見人、子供の財産身體を管理する權利が父にあると云ふ昔からの習慣法も改正しなければならぬと云つてゐる。

既婚婦人の財產に關して、男女平等な權利が確立されたように一般が信じてゐるに反して、國民婦人黨は其れを認めず

成程夫妻別々の財産法は、妻の親の遺産及び妻の屋外勞働によつて得たものに對して妻は權利を持つてゐるけれども、家庭內の妻の勞力が認められない以上は一家の財産に對して妻は其の財産の上に何等の權利がないのであるから、夫婦別々な財産に關する法律は有名無實だと云つてゐる。

離婚の理由に關しても、妻が夫の知らない姙娠をすれば直ぐに離婚の理由になるのに夫が私生兒を持つても其れが離婚の理由にならないことや、妻の姦通は認識で離婚の理由となるのに、夫の姦通は證據を要すると云ふ如き不當であるといきまいてゐる。そして、それ等の不平等を取り去ることが、參政權を得た米國婦人の第二の戰ひであると國民婦人黨は宣言してゐる。

ロイドジョージとスマイリー

英國坑夫が罷業するや否や、英國交通機關從業員、並びに、全國の輸組合が其れに同情罷業をしようとする形勢が見へたので、スワ三角同盟、英國の革命が始まると云つて、全世界は震駭した。そして、坑夫組合の首領スマイリーを恰かも革命家でゞもあるやうに思つた。併し、スマイリーが首相ロイドジョージに宛てた書簡の一節に次のやうなのがある。

『我々炭坑夫は、殊に、組合の幹部は無責任に我が國の產業に干渉するの目的をもつてことを爲さうとするものは一人もない。それにも拘らず、多くの新聞紙は我々幹部の或る者を特別に注視し、或ひは、又、私をサンデカリストであるやう

に云ひなし、そして坑夫の利益のためにるやうに云つてゐる。けれども、それは事實でない。我々坑夫同盟員の實行委員の中には私の知る範圍内に於てはそう云ふ考へを持つて居るものは一人もない。我々は國家が坑山を所有し國家が國家の利益になるように經營されることを希望するのである。其れを希望する理由は、國家が經營に當れば生產費が節約出來るのみならず生產高も非常に大きくなるからである。』と。

又、ロイドジョージがスマイリーに宛てた手紙のうちに次のやうな言葉がある。これは今擧げた手紙に對する返事ではないが首相の考への一端を示すものとして此處に書きぬいて見る。

『……政府は今回の同盟罷業を妨止しやうとしてあらゆる努力を盡した。そして貴下の同盟に對して二ッの案を提出した

坑山を經營し、一般國民の利益を無視す

其の第一は賃銀に關しては公平な經驗のある適當な仲裁官に委ねること。第二は生產高の增加を保證した時には賃銀の値上げを可とすると云ふことである。今日石炭の生產高を增すことは我が國民のみならず、歐州の國民を救ふことになる。石炭不足のために我が國の船舶は空船で航海しなければならないやうな狀態にある。これは我が國の商業に一大危險である。故に、もし、坑夫同盟會が政府の此の提案に反對さるゝならば遺憾此の上もないことである。もし、貴下がこれを拒絕されるとしても一般國民は、勿論、貴下の同盟會員のうちでも、經驗あり、責任觀のあるものは必ず政府の此の提案に贊成し同情するであろうことを疑はない』

こう云ふ風に其の行き方に違ひはあつてもロイドジョージと云ひスマイリーと云ひ一般國民の幸福國家の發展を目的としてゐる點に於ては違ひはない。



治安警察法改正案と藤村義郎男

貴族院に於ける治安警察法改正案に關する藤村男爵の言説を讀んで、たゞ〳〵感心してしまふことは、今の世の中に、よくもこんなことが云へたかと思ふことである。此の案が否決されたことを聞いた時に私は呆氣に取られてしまつたが、更に否決になつた理由さしての男爵の言説を讀んだ時に、こう云ふ議論で動かされたと云ふ貴族院の眞價に大きな疑ひを起されねばならなかつた。

　これは世界に對し、全國の婦人に對して藤村男爵計りの恥ではない。貴族院の恥である。もし、貴族院が始めッから此れを否決しようと思つて居たのなら貴族院の頑迷を世界に語るものであるし、もし、又、そうでなかつたにも拘らず男爵の意見に動かされたのださすれば、あのやうな時代とかけはなれた愚論に動かされる貴族院の不見識を發表したと同じである。

　或ひは、又、一部の人々の間に云ひ傳へられてあるやうにあの案が政府の提出したものであるから、政府に反對するために否決になつたのだとが、又は、あの案の通過に盡力して居る婦人達が氣に入らないからあゝ云ふ成り行きになつたとか云ふのが事實なら、これこそ實に背任も甚しいものである。なぜなら、國民の一部である政府者に反對するために、又は、少數な婦人を嫌ふために全國の婦人の生活を左右したのであるから其の不偏不公平は斷じて許すべからざるものであ

る。

私は此の案が否決されたと云ふこと其れ自身よりも貴族院が問題の眞髄にも觸れて見ないで、唯、「面白くない」位いの處でかたづけてしまつた不謹愼なめくら蛇的な態度を惜しむものである。

第一に、男爵は、貴族院は模範的な集會であるから婦人の傍聽も差し支へないと云つて、貴族院以外の政談集會に婦人が出席することを拒んで居られるのであるが、成程、貴族院が男爵のような頭のよりあつまりであるならば、男爵の理想とする女の爲には模範的な集會であらう。婦人を冬眠の狀態に押し込んで置いて世の中とは全くかけ離れた時代後れの人間にして置くには。

第二に「婦人が政治運動をすることは面白くない」と云つた此の言葉は婦人に對する男爵の態度を語り得て餘りあるものである。男爵にとつては婦人の存在は唯單に男子を面白がらせれば足りるのであらう。女が全く自分の意志を捨てゝ男子に氣に入るように化粧をしたり、男子のきげんを取るために諂つたりふざけたりして居たなら定めし、面白いだろう。御氣に入るだろう。そして、男爵の周圍の女はそうして居るかも知れない。けれども、世間の女には意志があること、世間の女の人生觀は男を面白がらせるための人形ではないことを男爵は目を開いて見なければならない。

第三に、男爵は「婦人の政治運動は生理的から見ても心理的から見ても自然の理法に反して居る」と云ふ。實は、私も婦人が政治上の仕事に無條件に熱中することは好まない一人であるが、併し、それは一般婦人に對する希望であつて、少數の又は例外の婦人が大多數の婦人を代表して政治的に活動されることに對しては矢張り尊敬と感謝の念を持つてゐる。そして、男爵の「自然の理法に反する」と云ふ意見を決して取らない。のみならず、男子が馬鹿で頑迷で進歩の潮流を見ることも出來ず、偏見が一度男に與へた男の特權をいつ迄も固守して、社會的の並びに種族的の責任には無感覺で、そして、女を男を面白がらせる人形として置かうとする時に當つては、時代に目覺めた責任觀の強い婦人は、先づ何は置いても、そう云ふ無識者、人道の敵を一日も早く取り除けることに努力しなければならないだらう。

第四に『女子の本分は家庭、教育、社會的の事業にあると思ふ』と云はれる。實に家庭は國家の基礎、國民の苗床、そして、教育は國民を成長させるに缺くてはならない肥料であることを私は認める。であるから女子許りでなく男子も家庭に教育に盡すのが人としての本分である。けれども、男の心が驕つて人道から脱線してしまつて、國家の基礎、國民の苗床である家庭の安定を脅したり、外見(みえ)を張るために役にも立たないものを造るために國家の財力を浪費したり、喧嘩の道具を大きくするために教育費を貧弱にしたりしてゐるので、婦人は婦人の本分を守らうとしても守つて居られないやうな狀態に今はなつて居るではないか。

第五に、男爵は『女子が社會の表面に出て政治上の運動をすると惡い結果を齎すと云つて平の政子、則天武后、エリザベス女王の政治を例に擧げて居られる。此處に至つていよ〳〵男爵の頭の價値がさらけ出されてゐる。男爵の言葉によると女性の政治が皆惡くて、男性の政治は古來どれもこれも皆完全であるようである。處が、事實は其れに反して、男性の政治にも善い處も惡い處もあつた。それは、女性の政治に善い處も惡い處もあつたのと同じである。

のみならず。文學、政治、產業、其の他あらゆる方面から英國を世界的となし、やがて、英國を世界の第一位に上げた人はエリザベス女王であつたではないか英國がエリザベス朝に全盛の花を開いたと云ふことは英國の歷史をたとへ一頁でも讀んだものは皆知つて居る事實だが、藤村義郎男は此れを何と見らるる？ エリザベスにも惡い處はあつた。併し、それは政治に關してゞはなかつた。けれども、古來の多くの男子政治家は政治上惡事をして居なかつたか？

私は漸進主義者である。革命と云ふことを全然とらない人間である。けれども、世間には過激な思想の持主が少なくない。そして、其の過激な思想を釀造するものは、實權を握つてゐて、しかも、時代を解さない頑迷固陋な頭であることを最後に一言忠告して置く。



婦人の獨立とは

獨立と云ふ言葉は、殊に、これが女子に適用された場合には大變立派そうに思はれてゐます。それは何にか素晴しいことででもあるように思はれて新婦人の渇望のまとになつてゐます。同時に人間の本質の中に植へつけられてあつて人間の力ではどうすることも出來ない慾望、女性は男性を男性は女性を求める心も矢張り依然と存在してゐます。そして、男女の其の心は昔と今も同じように一人の女は一人の男に一人の男は一人の女に全然自分を托し又托されることを希望する、つまり、男女兩性が完全に融合し合體することを希望してゐます。して見ると肉體は愚かたましい迄も托し合つた男女の間に、相手とは無關係に獨立し得ると云ふような部分が存在し得るものでしようか？

男女の間計りでなく、私共を包んでゐる此の社會其れ自身が既でに物質的に心理的に相頼り相助けしてゐます。相依り相助けしたことによつて家族が出來、國民が出來、そして、文明が生れました。

社會の起原を考へるならばそれが決して個人的でなかつたことが分ります。單一の細胞を一ッ處にどんなに澤山集めて置いてもそれが複細胞の有機體とはならないのと同じです。それと同じことで孤立した人間が一ッ處に集まつても其れでは社會は出來ません。社會は個人々々の心理的交互作用の産物であります。ですから、相頼り相助け統一されて續いて來たものが社會であります。

で、此の社會の發達を詳細に考へて見ますならば吾

食住と生殖の過程の發達と云ふことになつてしまいます。そして、此の衣食住を得ると云ふことは人間が獨立して居る狀態よりも共同した方が都合がよかつたのです。ですから、自然淘汰は始めつから孤立したものを排除して、團結してゐるものゝみを生存せしめて來ました。殊に、個人と個人の間に相縋り相助けることが遙かに、そして、確かに行はれてゐる團體、云ひかへれば精神上の交際が充分にあつて共同と秩序が高度に發達して居れば居る程生存の最大なる資格があるのです動物でも團結の力が強ければ強い程生存の機會が多いのです。

そして、動物の社會や、發達の程度の低い人間社會に於ては食物を得ることが重用な仕事であります。けれども、高度の發達を遂げた人間社會に於ては生殖の過程が猶一層重用になつてゐます。一人の子供の存在は兩親の存在と云ふ社會的條件が含んでゐます。そして生殖から起つて來る最も重用なものは男女の關係と云ふよりも、寧ろ、親子關係であります。殊に、母子關係であります。母と子の關係のうちの同情が社會生活の發達の發端であります。ですから、家庭と云ふものが同情的社會生活の最高な形式であり、又、其の家庭の完成が文明社會の有識な目的であります。

同情的意義に於ての社會は其の發端を家庭に持つたのです。云ひかへれば、子供と母の關係から始まつたのです。人類學者の研究によると人間は曾て孤獨な生活をしてゐた形跡はないと云ふことです。最下級な野蠻時代から人間は家庭を造り、其の家庭の團體を造つて生活してゐたのです。ですから、人間は始めつから社會的であつたのですが、併し、其の頃の人間の社會性は狹いものであつて、それは重もに自分の家族と家族に直接關係あるもののみに限られて居ました。そして、此の同族關係を一般に廣く應用しやうとするのが眞の文明の目的です。

今日の文明を造つたものは、實際、人間の小さい團體、家族であつたのです。則ち、家族が文明の核であつたのです。家族がだん／＼大きくなつて今日の社會が出來たのです。家族があらゆる社會制度を養成したのです。家族があらゆる制度の苗床であるのです。人間は家庭に於て、言語を始め社會生活に必要な根本的の智識、信仰、及び、ものゝ標準を覺へます。家庭に

於て人は、又、愛と奉仕と自己犠牲と云ふことを覚へます。此の三つは家庭の理想であると同時に人類の理想となりました。そして、此の三つの理想を有識に果したゞけづゝ其れだけ文明は進むのです。

けれども、小さい團體、則ち、家庭から大きな社會が出來る迄には其處に一筋の經路がありました。そして、それは分業と云ふことでありました。分業によつて勞働の能率はあがり、そして、高度の發達に達することが出來たのであります。それから、もう一つ私共が知らなければならないことは同種類のもの計りが集まつたのではなく、異種類が加はつて團結することによつて社會は强固になると云ふ事實であります。異つた種類のものが相互貫徹し調和して行くことによつて社會は益々强くなつて行くのであります。差を調和して行く處に大きな力がある。つまり、同と異と云ふことがあつて社會は進歩して行くのです。多くの同と多くの差から起つて來る多くの反動の統一が眞の社會であるのです。そして、其の統一は反動をお互ひに運用し合ふことであります。かくして、前に云つた家庭の理想大きく云へば社會の理想が實現して行くのです、

ですから、人間には夫婦があり、家庭があり、又、其の家庭の團體、則ち、社會があつて始めて人間に意義があり發達があるのです。こう云ふように、一個人の生活には絶對に相手が必要であり他人も必要である社會に生きてゐて、どうして、獨立と云ふことが有り得ませうか？　故に、現代人が殊に婦人が喜んで使用してゐる獨立と云ふ言葉は唯單に一つの修辭であつて人間が此の社會の中に生きて居る以上絶對に獨立と云ふ事實は存在してゐないと私は考へます。

たとへば、政治學の三權分立……立法司法行政……は各々が獨立であると云つても實は政府と云ふ一つの幹から出た三本の枝であると同じように一切の社會制度は社會と云ふ一本の幹の枝であります。もし、此の枝の生活を獨立と云ふならば、唯、其の作用の獨立に過ぎないのでありますから、女性の獨立と云ふことは、男子が男子の使命を忠實に出來るだけ完全に果し、立法部は立法部の使命を、行政部は行政部の使命を忠實に出來るだけ完全に果すのと同じ意味で、女性は女性の使命に忠實に女性としての作用を出來るだけ完全に果すことであります。



生命の新價値

不安は現代の特長であります。女も男も上中下流階級も今日に於ては皆此の不安の渦に襲はれてゐます。そして、これは何の徴候でありませうか？　人間の價値に對する觀念を造り直さなければならぬ時に、今や人類が到達したからであります。

今日迄、人よりは物が大切にされて來ました。物を造り物を保存するために人命が無駄にされることを一般は何とも思つて居りませんでした　其の不正に今、世界は目覺めたのであります、此の人命の新價値を一般に認めさせようとする要求は婦人の社會的目覺めに從つて一層强くなりました。婦人運動の目的は、實に輿論の流れの中に人命の新價値を注ぎ込むものであります。

如何なる時代に於ても高尙な男と女は生命の保存に努力して來ました。けれども、如何なる時代に於ても今日程、人間を無駄にすることに對する反對の聲が大きかつたことはないのであります。生命保存と云ふことは現代の標語になつて居ります。今日の無數の利他的運動の動機は皆個人の保存、則ち、個人の權利の確立と云ふことが含んでゐないものはありません、社會は今やうやく社會に對する個人の價値を認め始めたのであります。

利他主義は婦人特有のものと云ふのではありませんが、併し、生命を保存することは婦人の役目でありました。處で、もし、婦人が廣く外界と交渉することによつて、もし、それが生命を保存し生命を改良する利益と並行しないならば婦人は女性としての特色を侮辱されたことになります。なぜなら、生命を創造するに

付いての眞の苦痛を知るものは婦人計りであります。人間の血と肉の全部が婦人の嘗めた苦痛の結果であります。自分の命迄をも危ふして苦痛を嘗めた婦人でなければ人命の眞價値は本當には、分らないのであります。

ですから、不安は現代の特長だと前に申ましたが。中でも婦人の不安が最も大きいのであります。どこへ行つても不必要に人間が無駄にされる其の狀態に婦人はどうしても我慢が出來ないのであります。婦人が精神的に目覺めるに從つて婦人はます／＼はつきりと其の事實を見るようになりました。そして、人命に對する正しい標價を世界に要求してゐるのであります。則ち、草木、及び、動物に寛大に與へられてゐる保存の精神を、もつと我々人類に直接利益のある人命の保存に向けて貰ひたいと云ふのが、我々婦人の要求であります。これは消極的には、社會が人命を無駄にすることを阻止し、積極的には母性保護と云ふことになるのであります。

若い人が、もう、見慣れてしまつてゐる氣付かずにゐるもの、或ひは長い習慣の結果、惰性でことが運ばれてゐる事柄に若い人は目を付けます。昔からの習慣のかたくなつてしまつた動脈へ理想主義の若い血を注入しようとするものが今日の婦人論であります。つまり、新しい土臺を築いて其の上に新しい人類を造らうとするのが婦人論の目的であります。そして、其の新しい土臺は新しい人類を支へる計りでなく、新たに價値を發見された人類の凡ての考へを入れる程充分大きな堅固な基礎を造らうとするのであります。

ですから、前に云つた不安は決して不幸なものではなく　人類進歩のしるしであるのです。新しい理想を生み出すために今人類は苦しんでゐるのです。其のうちでも婦人が最も多く苦しんでゐるのです。最も多く苦しんで居るのは婦人ですけれども、併し　此の新理想を生まうとする仕事は婦人の力計りでは完成しません。どうしても男女共力しなければならない。そしてそれが婦人論です。ですから、婦人論は男子に對抗するのではなく男子と調和し、共働しようとするのであります。

生命を保存し、改良するには女性のみの力で出來るものでもなし、男性の力のみでは猶更出來ないのであ

ります。

過去に於て、人命た價値がなくあたふた無駄にされたと云ふことは、これは進歩の過程に於て止むを得なかつたかも知れません。數千年の間の人類の進化は下等動物の進化と同じように自然淘汰で進んで來ました。そ昔に溯れば溯る程人命は安く見積られてゐました。そして、大多數の人間は少數の人間の鞭の下に働かされてゐました。けれども、少しづゝ〳〵人間が進歩するに從つて少しづゝ人權と云ふことが認められて來ました。そして、今や人命を粗末にすることに對する反對の聲は全世界の聲となつたのであります。

そして、婦人運動の目的は直接に間接に此の人命の無駄を防がうとするものであります。婦人が要求する權利と云ふのは其の無駄を防ぐための權利であるのです。下層階級の生活改善の聲も、工場法設定の要求も母性保護及び、兒童保護の要求も最低賃銀法設定の要求も、どれもこれも皆、人命の保存、人命の改良を目的としてゐるのであります。

此處數十年の間、男子の精力は產業の上に集中されてありました。そして、產業上の繁榮がありました。男子の神經及び心的能力は生產、分配、及び、競爭に全部用ひられてありました。其の結果、男子は人命とか人道とか云ふことを頭に置く餘裕を持つてゐませんでした。そして、これが德性の萎縮になりました。競爭は產商業に活氣を與へるものでありませう。けれども、同時にこれは利他主義を貧弱にするものであります。

此の時に當つて、男子程競爭上の偏見を持たず、男子程利己主義的になつてゐない婦人の目には人命の無駄にされる事實が餘まりに無殘に映りました。下層階級の、不衞生な住宅、有害な工場、職業のために疲勞しきつた母、榮養不良な子供等が婦人の目を痛い程刺戟しました。で、高尙な婦人は生命保存の精神に鼓舞されて今日迄見逃されて居た其の社會的禍の救濟に突進して行きました。

過去に於ても、人命は物より貴いものだと云ふことは決して云はれなかつたのではありません。けれども、それは唯美しい感情として受け取られるだけで、實際にそれを社會に應用しようとする企ては無かつたのであります。けれども、今は其の考へが着々實行に

移される時に到着しました。

　そして、今、生命を保存し、生命を改良するに付いて、其の根本となるべき理想は一人の男と一人の女が共力して新しい生命を保存し、其の生命が無駄になることを防ぎ、そして、人命の價値に對する觀念を造り變へることであります。男許りでも女許りでも人命强奪の事實に反抗することは出來ません、歐洲大戰爭が其れを證明して居ります。今後の政治には婦人の殊に母の發言權が絕對に必要であります。男子と女子の聲が調和した時に、始めて『人命は物よりも貴い』と云ふ理想が實行に移され得るのであります。

■丹那山隧道に埋沒された門屋工夫の「自分は責任上一點の苦しみを感ぜず、靜かに死に就く。』と云ふ言葉は本當に萬人の模範とするに足るものであります。

　世の中に自分の責任を守ると云ふこと程美しいものはありません。それは其の筈であります。各々皆自己の責任を守り自己の職分に忠實であるならば本當に此の世の中は樂園のようであるに相違ありません。法律も警察も必要でなくなります。

　現代人の一大缺點はいろんなものを見たり聞きかじつたりする結　口でこそツベコベと一人前のことを云ひながら實力が其れに伴はない。責任なぞと云ふことは全く無く、どもすると其れが騷々しい騷擾のもとなり識者をして顰蹙せしめて居たのでありますが、切迫つまつた工夫からの此の一言は我が國勞働者の眞價を發揚し、我が國民性は、常に表面に現れてガヤ〳〵世間を騷がせて居るものとは異るものであることを證明したことになります。

　罪惡、監獄の暗雲、浮薄な議論、突飛な運動こう云ふものに取り卷かれて私共の心が悲觀に傾かうとして居る時に、日頃社會的にはもの云はない勞働者の中から沈着な責任觀念の强い人達を見出して本當に私達は意を强くすることが出來て此の人達に感謝せずには居られません。自分達の行ひ、自分達の言說に對して世の中の毀譽褒貶が何であらうとも、こう云ふ本當の人間の道を踏む人々が世間には必ずあつて、そして、本當のことに對しては必ず點頭いてゐるであらうと思ひますから。實に此の人達は私共の毎日の努力に百倍の勇氣を附け加へて吳れたのであります。



新時代の戀愛と結婚

何にもかもが進步しつゝあることはいつの時代に於ても同じでありますが、過度期にある現代に於ては、殊に、急激に、何にもかも改造されようとして、一切の習慣・及び、制度が疑ひの目をもつて見られ、解剖され、そして、變化を受けようとしてゐます、けれども、何もかもが改造され變化を受けても 決して、變化を受けないものは戀愛と結婚であります。

戀愛、及び、結婚に對する人々の態度には變化がありました。又、なければなりません。のみならず、此の上にも、まだ／＼斷然たる變化が無ければなりません。けれども、其れは、唯、戀愛、及び、結婚に對する態度であつて決して戀愛と云ふこと結婚と云ふこと其れ自身に變化があるのではありません。

昔は落雷を避けために線香を立てたり、呪文を唱へたりしました。つまり、怒つてゐる鬼神に其の怒りを鎭めて貰はうとして哀願したのです。けれども、此の頃では避雷針を造つて落雷を避けるのみならず、其の雷をひッ捕へて來て燈火にしたり、暖爐にしたり、車を引かせたりします。けれども、雷其れ自身の性質は昔も今も少しの變りもない、唯雷に對する人間の態度が變つ のです。

戀愛に付いてもです。今迄は戀は思案の外であるとか。戀は曲者であるとか、女は謎であるとか云つて戀愛を一種異樣な魔物であるように考へて來ましたが、併し、今では此の戀と云ふことに付いて人は批評的の目を持ち、これを解剖しようとしてゐます。

人間は自然を征服することに或る程 迄成功しました。前に云つたように空中に荒れ廻つてゐる電力を捕

へて自己の用に供し水力に轡をはめて私共に必要なものを生産させ、星の性質を調べたり、太陽の運動を測定したり、實に、自然界に支配される代りに、自然界を手掌に載せて其の性質を解剖し支配しようとします實に、智力の力は素晴しいものでありました。

處で、偉大な効果を擧げることが出來る智力を得た人間の心は、直きに、驕つて、何もかもが智力で行けるように早呑込みをしてしまいました。そして、今日迄の婦人問題も矢張り其の弊に陷つてゐたのであります、

つまり、智力に餘まり重きを置くの結果戀愛を輕視しようとする傾向を持つようになりました。戀愛は人生に於ける一挿話、結婚は私共の生活の、唯、一部分であるように考へようとしました。

けれども、戀愛と云ふものをどう云ふ風に見た處がつまり、人生に於ける一挿話として見た處が、又は、以前のように其れが一種の寶物であるように見た處が、矢張り、昔も今も同じように其れは其の優勢な力を人間の上に揮つて、男の又は女の全生活を根本からゆすぶり動かします。其處で私共は、何故に戀愛は私共人間の上にかくの如き優勢な力を持つてゐるかと云ふことを考へなければならない、則ち、其れは私共の性質に根本的に植へつけられてある自然の意志であると云ふ處を考へたいと思ひます。かくして、自然は種族の繼續、其の向上を計畫したのだと云ふことを考へたいと思ひます。

戀愛と結婚は種族的な大使命を持つたものであり、結婚制度と云ふことは凡ての制度のうちで最も古く、殆んど、人間がまだ動物のような狀態に居るうちから存在してゐたと云ふことを認めたいと思ひます。子供を育てるには兩親の共力が必要である處から結婚制度は生れたのであります。種を保存するために自然は人間に計りでなく高等動物から鳥類に至る迄家庭生活と云ふかたちを定めて置きました。そして、種族の進歩、則ち、子供の利益と云ふ立場から、子供のためには一人の生みの母と一人の生みの父の保護が必要である以上、一夫一婦制は最善な、そして、最上な制度でなければなりません。

智識にかぶれた新しいことを好む人達が、たとへ、どんなことを云はうとも、先づ、釋迦、基督、日蓮と

云ふような非凡な人物は別として、普通の人間には異性との接觸が必要であり、そして、其の上に男は妻を全部自分のものにしようとし、女は夫を全部自分のものにしようとする希望を熱烈に持つて居ます。そして結婚制度、及び、家庭制度は皆此の人間生來の重大なる必要の反映であります。

　異性との接觸を慾望し、しかも、一人が他の一人全部を慾望するつまり兩性の融合を慾望する結果は、其處に、必ず、家庭と云ふ感情が伴つてゐます。そして其の家庭と云ふのは單なる木造の又は石造の家ではありません。家庭とは人格の反映であります。しかも、婦人の人格の反映でなければならないのであります。

　けれども、今日迄の家庭は傲慢な男子の勢力が充滿してゐて、家庭内の空氣は主婦の人格の反映ではなく男子の父男子の家庭であつて婦人は唯其の男子の家のうちの一個の道具に過ぎなかつたのです。智力的な婦人が家庭生活を呪ひ結婚を避けようとするのも、彼女等が智力に囚はれたとは云へ、此處にも一重大原因があるのです。兩者の融合でなく所有される從屬せしめられると云ふ事實が除去されないうちは新婦人はいつ迄も家庭生活を呪ひ結婚を避ける傾向を止めないでせう。そして、其の結果、不幸な圓滿を缺いた男や女の數が多く、其の上に人種の損失は甚大でありませう。

　夫にも妻にも同等に精神上の自由があり、同等に法律上の權利がある時にあらゆる婦人が始めて喜んで家庭に入ることに甘んじ、圓滿に天性を發揮し、そして家庭をして自分の人格の反映たらしむることが出來ます。今迄は、結婚は婦人のためには自分の人格を無にすることでありましたし。外との關係を全く絶つことでありました。けれども、新時代が要求する結婚は男女の生活を豐富にすることであり、男女、力を合せて幸福に社會のため人種のために奉仕することであります。

　ですから、眞の意味の婦人運動の目的は野生の戀愛を解放することでも、單に經濟上の力を得ることでもありません。自覺ある婦人は戀愛の自由を要求します强制結婚には戰慄します。けれども、それは情實や經濟上の理由から成立する結婚を抗み、眞純な愛稱の結果の結婚を希望するのです。

　けれども、今日迄の婦人運動の誤まりは個人として

の婦人の權利の延長、婦人の經濟上の獨立を目的とし其の上に戀愛を個人の事として居たゝめに、婦人のためにも男子のためにも、又、社會のためにも不幸を招きました。個人の幸福、個人の權利の伸長としてのみ見る戀愛は非社會的であります。一體、文明の進步とは社會全體の幸福を意味するものです。處が、今日迄の婦人論は個人としての婦人の自由を叫ぶあまり、社會と最も交渉の深い、否、未來の社會其れ自身である子供を邪魔物扱ひにして來ました。けれども、其の大なる誤まりであると云ふことは確實に除々と世界が認めて來ました。

婦人の位置と云ふことに全注意を傾けてゐた世界は今や子供と云ふことに其の視力を集中して來ました。國の力、社會の改良、人類の幸福と云ふことは未來の國民、未來の社會を形成する子供の質によると云ふことに氣付いて來たのであります。其處で、人類の進步引ひては婦人の又は男子の幸福は、決して、結婚を破壞するのではなく結婚を改良することによつて得られると云ふことを認めて來たのです。

其處で、物質の上に成立する結婚でなく、肉慾に出立した結婚でなく精神の上に結婚に成立しなければならぬと云ふことになつたのであります。そして、これは優生學からも、生物學からも、社會學からも批准されて居るのであります。

『自由選擇による結婚を爲し得る婦人が新時代の改造者である。』と或る學者は云つてゐます。

人智の力は前にお話したように素晴しいものでありますが、併し、人間の活動が智力で終つてしまつたならば人間の力は直きに制限されてしまいます。人間にはもう一ツ征服しなければならない領土がありますが其れが人間の精神であります。人間の精神は自分の利益と云ふことに興味を限つてしまはれない程大きいものであります。生存競爭と云ふことは見逃そうとしても見逃がせない大きな事實でありますが、併し、人間には元來もう一ツの人間的要素があります。則ち他人のために計らうとする衝動であります。野蠻人ですら負傷した他人を見殺しにはしませんでした。木の枝ッ上にしつらへた自分の住所に、又は、穴の中の住所に負傷者を連れて行つて介抱してやりました。又、今日に於ては老衰者や癈疾のやうな生存競爭に耐へられな

い者を不完全ながらも發達する方法を立てゝ居ます。こう云ふように利他主義、愛と云ふ精神的な方面を豊富にすればする程人間は強くなります。

それだけではありません。人間は自分のうちに持つてゐる精神の力によつて外界と自分との關係のみならず。自分の內部の力の源と自分との關係を發見しました。つまり、自分自身を發見したのです。人間は單に食慾愛慾を持つた肉體計りではないし、物質を征服することが出來る智力のみでもありません。つまり、人間は肉體と智力の外に創造的精神を持つてゐるのですそして、これは無限なものであるのです。人間は藝術宗教、科學を發達させるのみならず、猶又、自分自身が最善最高な境に達する可能力を持つてゐます。つまり、自分のたましいのうちに起る精神的の嵐を支配する力を持つてゐるのです。人間は自己を制裁する威厳則ち、自分を最善最高に導いて行く道を學びました。人間は自分が創造された計りでなく、自分自身が創造者であります。人間は進化のおもちやではなく進化の主人であります。人間は自由な精神の可能性を通して自分自身の運命の創造者であるのです。何物にも屬しない精神の力をもつて、あらゆる誘惑を押し退けて創造の絶頂に立たうとする意志を人間は持つてゐます。

此の意志、此の精神の力を婦人が認むることが婦人の自覺であります。精神的生活と云ふのは本誌前號でも云つたように、唯、單に宗教的になることではありません。つまり、神佛を拜んだり、教會に行つたりすること計りではありません。誠持つ人、寛容持つ人、徳を持つ人の毎日の生活が精神的でなければならないのです。殊に、次代養成の任にある婦人が精神的でなければならないのです。精神の力はものを創造する計りでなく、ものを復活させます。精神の表現はいつも同じではありませんが、精神の力それ自身はいつも同じで、そして、人間の內部に燃へて居るものです。

自覺したと云ふことは內部に燃ゆる其の力を認め、そして、どう云ふ風に其の力を用ゆべきかを知ることであります。ですから、自己確立と云ふことは精神的になり、創造的になり、そして、進化の最高な目的に共同して働くことであります。

婦人の權利伸長、婦人の經濟上の力の獲得は婦人の內部に如上のような精神及び意志があつてそれを保護

するために必要だとする時には無上命令的に必要であります。けれども、そう云ふ精神が燃ゆるのでもなく、そう云ふ確固とした意志があるのでもなく、徒らに、外面的に權利伸長、經濟力の獲得に絶叫することは、何とも騷々しく、まるで破れ鐘を叩かれるような氣持ちがして私としては我慢出來ないのであります。

今や、一切が改造されようとしてゐる過度期に立つた私共は、殊に婦人は、折り／＼本當らしく光る狐火のような議論に迷はされることなく、太陽は太古の昔も今日も同じような光りを地上に投げて居ると同じように、戀愛と結婚は私共の生活に最重用なる意義があり、幸福の源であることを認めて、進化の軌道の上をまつすぐに進んで行きたいと思ひます。

草間判二

閉されし雪より出て田も畑も
嬉しそうなり春の日は照る

同じく丹那山隧道に埋沒された飯田技手の沈勇は實に貴いものであります。同技手のあの沈着な態度が埋沒された人々の頭の整理をして置かなかつたならば十七名の生命は全ふされなかつたであらうと云ふことは萬人の認むる處であります。私は同技手のあの態度を題材として、人は日頃腦を錬つて置く必要があることを子供達に説き聞かせたのでした。そして、北極探檢家ペリーが船員として身體の强壯な者計りを選んで連れて行つた處が、雪の中の無人境に居て、讀書趣味のない主觀的に無形なものを樂しむ習慣のない其の船員達は直きに倦怠を覺へ遂には、全く、衰弱してしまつたので其の次には、身體の强弱を問題にせずに頭のある人、つまり、科學的藝術的趣味、讀書趣味のある人々を集めて行つた處が今度は成功したと云ふことを併せて子供達に聞かせ、それで、「健全な身體に健全な精神がやどる」と云ふよりはむしろ、『健全な精神が健全な肉體を造る』と云つて聞かせたのでした。

春の小唄

原田琴子

×

護國寺の鳩ぽつぽ
坊やの好きな鳩ぽつぽ
ぽつぽぽつぽと啼ひて飛ぶ

護國寺の鳩ぽつぽ
ぽつぽのお家はどこにある
赤い御門の屋根のなか

護國寺の鳩ぽつぽ
ぽつぽおはよと手を振れば
一度にぽつと飛んで行く

×

場末の町の裏どほり
うすぐらひ靴屋の店の
窓の中なるキユーピツト
小さな小さなキユーピツト

うすら曇つた硝子戸に
つめたい風の吹くときは
どんなにお前はさびしかろ

春の光が訪れて
よものさくらの咲くころは
ましてお前はかなしかろ

貧しげな靴屋の店の
窓の中なるキユーピツト
うすもゝ色のキユーピツト

×

瓶にさしたるひともとの
フリヂアの香の
いみじさよ

はじめて君とあひしりし
むかしの春の
こひしさよ

山の手の
夜はふけて
さくら散る窓のべに
ほのかに月は
覗きたれ

椿の花をふみてくる
人あらじかと
窓による

×

さびしきは
筧の水のさら〱と

小笹にふれてひゞく音

うら／＼と照る日のひかり
くまもなく野には充つ
はだらにのこるくさむらの
残んの雪はさむけれど
大空に
たのしげに鳶は舞ひ
むらさき色の山のはに
霞はうすく帷を引く
のどかにも
晴れ渡りたる春の野べ
さら／＼さらと水は鳴る

×

母上よ
かゝる春の日は
いかにかおはす
ふるさとの
さびしき家に
たゞひとり世を
かこち給ひてや

母上よ
さくらさく春ともならば
美しきみやこに
遊びたまへ

せめて愛しき君が子の
あたゝかき住家に訪れて
君が子を
喜ばせたまへや

教育社會學講話（第三回）

成熟

持つて生れた本能も、生れながらに備はつてゐる資格も、生れると直ぐ働くものではありません。其の本能及び資格は身體の成長と共に徐々と發達して行くのです。そして、其の例は性に於て最も明らかに現れてゐます。普通、子供は十二三歳迄性の本能の何物も現しません。けれども、女の子は十三四歳、男の子は十五六歳で發情期に達します。勿論、これは平均した年を云ふので一人々々見るならば今擧げた年よりは早いものも遲いものもあります。そして、發情期に達しようとする前には著しく群居性を現して來るものだと云ふことです。

自分、又は、自分の周圍を制裁する理性の力は徐々としか發達しないもので、他の能力が成熟するに從つて追々に成熟して行くと云はれてゐます。で、此の理性は、實

は、肉體の力が稍衰へ始めた中年後迄は最高に純粋に發達しないと云ふことです。そして、其の發達の度は各々に異つて居るので學校の成績などに非常な優劣が出來るのです。

學校の仕事のうちで最も手加減を要するものは各々の子供に最も適當な時に正しい刺戟を與へることです。なぜなら、本能と云ふものは生れながら持つてゐてそして其の土臺を神經組織のうちに持つて居るとは云へ、猶、それでも其の本能は刺戟に從つて働くものですから。たとへば、人間の身體は食物を要求します。消化機關が其れを要求するようになつてゐます。けれども、或る刺戟を受けた時に其の要求は一層烈しくなります。食物を目の前に突きつけられた時、又は、食事の通知を受けた時など。そして、身體が其れを必要としない場合でも、又は、食べては體の害になる場合でも矢張り其れを要求します。

性に關しても同じことで、たとへ、發情期に達してゐても、他から刺戟を與へずに置けば比較的平靜で居つても、一寸した刺戟からズン〳〵發達して行きます。發情期

に達するれば他からの刺戟で直ぐ作用を起すように準備が出來て居るのですから。打ち捨つて置けばまだ眠つて居るものを殊更に刺戟を與へて性の本能を發達させ、そして外の能力とは約り合ひがとれないように變則に發達させてしまうことは健康を害します。のみならず、他の能力の成長を害します。

食慾と性慾は生れながらに充分強いものでありますから、此等の本能には出來るだけ刺戟を與へないようにしなければなりません。ですから、不完全な性的教育を與へるよりも、却つて、默してゐた方が害が少ないと思ひます。であるのに性の研究、性の教育の名の下に挑撥的な文字が社會に撒き散らされることは非常な害であります。從つて、罪惡であります。

と云つて打ち捨てゝ置いてはならない。此の二ツの本能は賢明な指導が必要です。そして、其の二ツに對する教育は其の本能を制裁し、精選することであります。猶、云へかへると、單なる動物的な食慾と情慾を恣にさせることの代りに、恣にするよりもより大なる喜びとなる情操になるように、そして、社會生活を向上させるように其

の二ツの本能を造り上げなければならないのです。

これに反して、より高尚な心的能力の方は前述の二ツの本能よりも後に發達するものので、しかも、出來るだけ大きな刺戟を必要とするものです。そして、又、此の心的能力は修養によつてどうにでも變更出來るものです。且つ又、子供の時代の適當な時に刺戟を與へて置かないと此の心的能力は全く發達が止んでしまいます。丁度、產婦が適當な時に赤子に乳房を吸はせずに置くと忽ち乳が出なくなつてしまうように。もう一つの重大なる危險は適當な時に正しい方向を與へて置かないと心的能力は有益な方面に發達して行くことの代りに有害な方面に發達して行つて、そして、不良少年少女となるのです。

又、子供が金を使ひ始める前に、金の價値、及び、如何にして其れを有効に使用すべきかを敎へられてないならば、子供は無駄使ひを何とも思はなくなり、そして、一生を不滿で通さなければならないようになります。

子供の環境は出來るだけ理想的にして置かなければならない。つまり、尊敬するに

足る人々と交際させて置く必要があります。そして、成熟して健全な人間になつた時には、彼等が、又、次の時代の健康的な環境となることが出來ます。

フイスク博士は次のように云つてゐます。「一體、子供は何は置いても自分が偉大な人間にならうとする慾望を持つてゐるものである。處で、時とすると其れが病的である場合がある。故に、子供の偏執は其處から解釋しなければならない。たとへば、大言壯語して見たり、大人物の態度を眞似て見たり、神聖とされてゐるものを侮辱して快としたり、或ひは特種の服裝をしたがつたり、畫が好きなら、髮を長くして畫家を氣どつて見たり、書物が好きなら讀めもしない大きな本を抱へて歩いて見たりすることは、つまり、皆、大人物になりたいと云ふ空虛な慾望からである」と。

本能の起原は何であるかと云ふことに關してはいろ〳〵な議論があります。けれども、大抵の動物は其の環境に調和して行くために、全然本能的な反動によらねばならないと云ふことには疑ひがありません。處で、動物に於ける反動は全然機械的でありますo さもなければ、いつも同じような調和を一樣に造り出す多くの刺戟の連結した

ものです。動物は自分の經驗を利用して自分等の調和のうちに改良を施そうとする能力は持つてゐません。從つて敎育する餘地がありません。最も、哺乳動物、鳥類、又は、或る種類の魚類は度にこそ違ひがあつても經驗を利用するものであるけれども、無脊推動物、及び、最下級の動物は全く敎育を受ける能力を缺いてゐるものであることは一般に了解されてゐます。

經驗によつて利益を得て行く能力を敎育を受け得る資格と云ふならば、敎育を受け得る能力を持つものは脊推動物に限られます。そして、それは、人間と人間に近い動物、則ち、馬、犬、象など其の著明な例であります。

人間は高等な有脊推動物の或るものと同じように敎育を受ける資格を持つてゐると同時に其處には一つ人間特有なものがあります。人間は自己を完成する前にどうしても敎育を受けねばならない。人間と動物と違ふ處は、人間には敎育性があると云ふよりも、敎育を受けねばならぬと云ふことです。

蛾のやうなものは蛹の狀態を脫するや否や、直ぐに、既でに充分發育して居る蛾と

同じような作用をします。何處で、どうして食物を得べきか、何處で、どうして雨風を避けていゝか、生れるとすぐ知つて居ます。ですから、蛾のやうなものは親からも他の蛾からも何等の世話を受けずに一人前の蛾になることが出來ます。

これに反して、人間は生れた時には全く意氣地無しであります。人間が生れた時から持つてゐる作用は營養を攝る位のものです。そして、これは本能を基礎としたものですが、併し、これも、動物の子に比較すると其の力がずッと弱いものです。ですから、人間の子は營養を攝る本能を持つてゐても全然親に頼らなければならないのです。

或る程度迄育つた後には人間の子でも人の助けを受けずに成熟期に達することが出來るかも知れない。併し、親の又は他人の世話を受けずに成熟期に達した子供は決して有益な善良な人間になることは出來ません。そう云ふ人間は人間生活に最大なる必要條件を缺いてゐます。と云ふのは細胞を通して親から貰ふことは出來ない、そして、人間生活になくてならない貴いもの、則ち、社會遺傳と云ふものをそう云ふ人間は自

分に受け容れてゐません。つまり、文明と云ふものを生れた後に親から傳へられなければ社會と調和する人間になれないのであります。

文明生活の習慣と云ふものは一人で居ては得られないものです。社會と接觸する前に親から其の豫備智識を受けて置かなければならないのです。さもなければ、子供は全く非社會的な人間になつてしまいます。

人類敎育の最も力强い建設的要　は、確固として動くことのない秩序ある家庭と、それに伴ふ平和と義務とである。家庭に於ける天眞爛漫、勤勉、進取の精神は、子供の德義、仕事に對する欲求、質朴な性質を發達せしめる。家庭に於ける手仕事、讀書、家庭に於ける平日及び休日のいろ／＼な習慣、家庭に於ける職業及び娛樂、それらは子供の情緒、想像に對して活潑と休養の時期を與へ、併せて確然たる輪廓と豐富なる色彩とを與へる。親子相ひ集つて自由に信實に生活する、淸い暖かい晴れやかな家庭の雰圍氣の中にあつては、誰一人としてその利益から離れて日を送るといふことはない。しかも各自が個人として各々その赴くがまゝの自由を有し、誰一人他人の權利を侵すものはないのみならず、必要となれば皆好んで助け合ふのである。（エレンケー）

編輯を終つて

『櫻は立派だなアー』と云ひ殘して私共の一人の友が逝いてから、まる一年が過ぎて、もう一度其の櫻は今咲き誇つてゐます。死んで行く友を慰めた其の櫻の滿開になつた一枝が去年のことは知らないよ』と云ふような顏をして私の机上を賑にしてゐます。

櫻が咲く時分には大抵天候が平穩でないことは本當に口惜しいと思ひます。花曇りなど云ふと穩かですが併しブン／＼風が吹いてホコリを卷き上げたりどしやぶりに雨が降つたりしたのでは實に悲慘と云ふような氣持ちがします。花、花、花、花の都！と云ふ文字を見ても私は其の文字にいつもむせろようなホコリが喰付いて居ろのが遺憾でなりません。もう一ツ花に付いての嫌やな聯想は如何にも俗惡な假裝をした花見の連中です。花は見たいがあの卑猥な花見の連中を見ろのが辛ひと云ふのが毎年の花の咲いた時の氣持ちです。實に馬鹿氣たお祭り騷ぎがしたい風習は我が國民の一大缺點だと思ひます。

咲いたと思ふ間もなく櫻はお祭り騷ぎを冷笑するようにパラ／＼と散つて行くでせう。そして、櫻と共に春も逝いて、日一日と初夏らしい氣分が濃くなつて行くでせう。咲き誇つた櫻を見ろのは勿論愉快には相違ないのですが、花が散ろや否や『待つてました』と云ふように新綠が萠へ上がつて來ろのを見ろのも氣持ちのいゝものです。自然界の凡てが一氣呵成に成長を遂げようとします。私達も自然界の生物に負けずに頭の成長を計りませう。

印刷所移轉のため仕事が中絶し今月は少し後れました。

本誌定價表

一册	六册	十二册
金二十五錢	前金 金壹圓四十錢	前金 金貳圓七十錢
送料五厘	（送料共）	（送料共）

■誌代及郵税は前金の事御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと■郵券代用は五厘切手にて一割增■廣告は御照會次第御相談いたします

大正十年四月二十三日印刷納本
大正十年五月一日發行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人 山田嘉吉

東京神田區仲猿樂町十七
印刷人 大杉直次郎

東京四谷區南伊賀町四一
發行所 婦人と新社會社
振替東京五三六八八

マグダレン・マルクス著

山田わか女史譯

既成文學を超越したる現代無二の名著出づ!!

女

わか子さんが半歳の心血と渾身の努力を盡して譯了し、我が愛する青年男女と婦人問題研究家の爲めに提供された書物は實に本著であります。此の書は女の赤裸々なたましひの正體を最も大膽に描破して歐洲の讀書界を震駭せしめ本國の佛蘭西では羽が生えて飛ぶやうに賣れ、到る所で盛大な講演會が開かれ、有らゆる著名な哲學者、批評家、小說家などから熱狂的賞讃の聲を浴せられ、今や爭ふて各國語に飜譯されつゝある世界的空前の名著であつて、私共は本書によつて始めて力強い時代の精神と女性にまつわる因襲的一切の情實を投げ捨てた代表的な新しい女の姿を有りのまゝに見ることが出來るのであります。

四六版四百七十頁
總洋布美裝天金函入
定價貳圓八拾錢
送料拾貳錢

發行所 東京麴町區平河町六丁目
振替東京三四六六七番
耕文堂
電話九段二六二七



三越の五月

五月人形陳列會（四日まで）
夏丸帯陳列（一日より）
古名畫複本展覽會（三日より）
下萠會繪畫展覽會（八日より）
御召さ小紋陳列（十日より）
挿花器陳列（同）
中形浴衣地陳列（十七日より）
團扇、扇子陳列（二十日より）

定休日 ◆ 十日 ◆ 二十五日 ◆

三越呉服店

東京駿河町